

セ ボ ネ

クガヤ

ランティア

ネットワーク



SETAGAYA VOLUNTEER NETWORK

世田谷発! ボランティア生活発見マガジン
<http://www.otagaisama.or.jp/>

2016.2 No.142

今月のトピック

特集●

「もっと語ろう不登校」の20年
～「自分語り」の場として～

まちの市民力! ● 世田谷 Lights in Farm

キラリ世田谷人 ● 芳賀 法子さん



イラストレーション●久保田美穂
イラストレーター。横浜美術短期大学、セツ・
モードセミナー卒業。
日常をテーマに描くことが好きです。
見る人がホッとできる絵を描いていきたい
と思っています。

●わたしの世田谷

世田谷区の高校に通っていた頃、友人と世田谷線を利用して帰宅することも。当時の世田谷線には冷房がなかったけれど、窓からの風が心地良かったことを今でも思い出します。

「もっと語ろう不登校」の20年 ～「自分語り」の場として～

いまから20年前、世田谷の子どもの現場にかかわる有志が集まり、「世田谷子どもいのちのネットワーク(通称こいのち)」が生まれました。そしてその年、「いじめよとまれ!」と題したシンポジウムが開催され、多様な分科会からたくさんのお会いが生まれました。

そのうちのひとつ、不登校分科会がその後も継続して、月1回実施されてきたのが「もっと語ろう不登校」です。主宰してきたのは、「オープンスペース“Be!”」の佐藤由美子さんと「フリースクール僕んち」の高橋徹さん。2016年3月で第200回目を迎えることを記念して、主宰者の2人に寄稿いただきました。

「もっと語ろう不登校」の
はじめ

いじめを苦しめた子どもの自殺が相次ぎ、話題となっていた20年前の1996年、危機に瀕する子どもたちのためのサポートシステムを生み出したいと願う、世田谷の子どもにかかわる有志が集まり、「世田谷こどもいのちのネットワーク」が立ち上がりました。

そしてその年、3回にわたる「いじめよとまれ!」イベントを開催。多様な分科会からたくさんのお会いが生まれました。その内のひとつの分科会で、その後も月1回継続してきたのが「もっと語ろう不登校」です。世田谷区教育委員会の後援を得て、毎月区のお知らせやセボネでお知らせしてきましたが、2016年3月で記念すべき200回を迎えます。

当初5、6人いた世話人も今は3人。それぞれ不登校の子どもの親や関係者たちです。世話人の活



写真右が僕んち玄関。左が“Be!”入口。今は、この2つの場所が交互に会場となっている。

動拠点「NPO僕んち」(主宰者／高橋徹)と「オープンスペース“Be!”」(主宰者／佐藤由美子)を交互に会場として提供しています。



「不登校」という現象の裏側に

「もつと語ろう不登校」は、「語り合う」ことが趣旨の会ではありませんが、この会は当事者だけのものでも、いわゆる親の会でもありません。

国の学校制度を完全に否定するわけではありませんが、この会ではまず、「学校に行かないで育つのもひとつの選択」という考え方を共有しています。子どもの「不登校」という外側に現れた現象だけを問題にするのではなく、そのひとつひとつの異なった背景に耳を傾け、分かち合います。

子どもが学校に行かなくなる原因を学校の教師やクラスメイト、家庭内に探そうとします。しかし、原因はひとつだけということはありません。いくつものことが偶然重なりあって、「不登校」という現象となつて現れるのです。

さらに、「不登校」という現象は社会が宿している複雑な問題の冰山の一角でもあります。例えば、私たちの社会にはどんな歴史があり、どんな社会体制であり、どんな価値観を当たり前として成り立っているのか、などを改めて問い直す事なくしては、不登校の子どもが何故、死を考えるほど苦しんでしまうのか理解することはできません。

そのような観点から、この会は不登校の当事者や家族だけでなく、不登校現象を共に考え語り合いたい方であれば、どなたでも歓迎することになりました。

大切にしてきた「自分語り」

「もつと語ろう不登校」で考えていきたいのは今、苦しみの渦中にある当事者のことです。不登校現象の広がり語るにしても、「今」「ここ」で、目前の本人・家族が直面している困難にしっかりと耳と心を傾け、それに共感するところが入口でありたいという姿勢を守っています。

会の進行は、参加者が順番に自己紹介をしていく形をとっていますが、お願いしているのは、他者の語りにじっくり耳を傾けるだけでなく、自分の番が来たら、一人称で自分を語ることです。もちろん「今日はパス」もあり、聞いているだけの参加もありです。でも、覗き見的、評論家的な一般論語りはご遠慮願っています。時折現れる取材者であっても、まず自分を語っていただくことにしています。

そうやって順繰りに語り続け、



心理カウンセラーの内田良子さんを
招いて学習会を開催 (2007年3月)

耳を傾け続けて20年の間に、「自分語り」という合言葉が生まれました。

「大丈夫」じゃなくても大丈夫!

20年を経ようとしている今、改めて強く意識していることがあります。それは、『大丈夫』じゃなくても大丈夫!』という姿勢です。不登校に直面した本人や親の悩みの中心には、「このまま学校に行かないで、将来どうなっちゃうん

だろう?」という心配があります。学校というひとつの成長の場から長く離れてしまうと、社会で独り立ちしていけないのではないだろうか、という不安です。

それに関しては、ほとんどの場合、案ずるよりは産むが安しです。そばにいる大人が子どもの「今」に丁寧に応える対応をしていれば、その子なりの時期が到来したら巣立っていく、ということを実感しています。もちろん、中には自力ではなかなか巣立てない場合もあります。世間的な意味で、「大丈夫」とは言えないかもしれませ

でも、そんな時こそ、世田谷版「おたがいさま!」の出番です。「大丈夫じゃない」時に、だれに助けを求めるとか、どう助け合うのか、どんな社会資源を利用できるのか、語り合う中で、そんなつながりや情報を手にし、周囲の関係を耕しておくのも、大人の大切な役目でしょう。

家庭や親自身に様々な困難があったり、子ども自身が自覚できていなかった「原因」がずっと後で見えてきたり、順調にみえていた人が青年期に達してから、どう社会参加していいか分からず苦しむということだって、少なくありません。この会は、そんな若者や大人の居場所にもなっています。

ここが「学校に行かなくても大丈夫!」しつかり寄り添う大人がいれば、子どもはその子らしく一歩一歩成長し、育っていくよ!』というメッセージを分かち合い、しつかり届けていく場であること、そして、たとえ「大丈夫じゃない!」事態であっても、その問題とどう向き合っていくのかを語り合える場でもありたいと、いつも願ってきました。

20年も続けていると、子どもだった人は若者となり、大人たちは「老い」に直面しています。直面する問題は、次々と違った形での目の前に現れ、それら全てがつな

